

《大学文書館1階・沿革展示室》第3期展示

女性が切り開いた研学の場 ——女性の北大入学100年



展示の概要

戦前期の日本の教育制度は、女性が大学に進学することを全く想定していませんでした。大学は男性のものであったのです。しかし、“学びたい”、“研究をしたい”という女性たちの意欲が開かずの門をこじ開けていきます。

1918年、加藤セチが北海道帝国大学農科大学（農学部）入学を実現してから100年。戦前期に北大で学び、研究した女性たちの姿を追います。

展示の構成

1. 大学の裏木戸を叩け～加藤セチ～
2. 産業振興に貢献ある研究で博士号～本間ヤス～
3. 実力でわたり合う～理学部に入学した女性たち～
4. 女性たちの理解者・支援者～大学人の振る舞い～
5. 第一線の研究者として～大学院生・大学教官の誕生～

展示の内容

I. 制度を突き崩したパイオニア

東北帝国大学で日本最初の女性の大学生が誕生した5年後、1918年に北海道帝国大学にも女性が入学します。北海道帝国大学総長佐藤昌介は、「北大は女性に門戸を開放する」と述べました。この言葉に呼応して北大への入学を希望したのが、北星女学校教諭であった加藤セチです。

北大の中では女性の入学に反対する声も強く、加藤は座り込みをして強い入学の意思を示しました。



加藤セチ(理化学研究所にて)

(『女博士列伝』1937年より)

北大は正規学生としての入学は認めなかったものの、正規学生と同様に全ての講義と研究指導を受けられる全科選科生としての入学を加藤に認めました。

当時の農学講堂（農学教室）



2年後の1920年には、本間ヤスも農学部に全科選科生として入学しました。また、辻村みちよは、農学部の無給助手（給料のない研究スタッフ）となり、大学で研究に携わる地位を獲得しました。

加藤、本間、辻村は、その後、科学研究者として第一線で研究業績を残していきます。彼女たちは学問・研究への強い意志をもって、制度を突き崩し、男性だけのものであった大学へ踏み込んでいった“理系女子”のパイオニアでした。



植物学教室員と本間ヤス（1926年）
（持田誠氏寄贈・出田新関係資料 0070）



応用菌学教室員と辻村みちよ（1922年）
（応用菌学講座旧蔵写真）

Ⅱ. 大学の男女共学化へのフロントランナー

1930年、北海道帝国大学は理学部を設置します。理学部では、条件付きながら、当初から女性の入学を認めました。同年、理学部1期生として吉村フジが入学します。北大初の女性の正規学生です。以降、1945年までに理学部には計22名、農学部には1名の女性が正規学生として入学しました。女性への蔑視・偏見・差別の意識が強かった当時の大学にあって、彼女たちは実力で男性学生に渡り合っていました。



物理学科・数学科の女性たち（1939年）
（中山久子氏寄贈）



当時の理学部（1936年頃）

卒業生の中からは、添谷晃子のように理学部助手として大学の研究職に就く者、金三純のように大学院に進学する者も現われ、その後、科学研究者として目覚ましい業績を上げる卒業生も少なくありませんでした。また、中等教育等の教員になる者、結婚して家庭人となる者などもおり、卒業後の進路は様々でした。

1945年、日本の敗戦後、日本政府は男女の教育機会の均等を掲げた「女子教育刷新要綱」を発表し、大学を女性に開放する方針を決定しました。男女に関わりなく、学ぶ意欲のある者誰もが入学を志願できる戦後の大学制度に説得力を与えたのは、戦前期に大学に入学し、学問の世界で女性の実力を示し続けた彼女たちの存在です。彼女たちは、戦後の大学の男女共学化を可能にしたフロントランナーであったと言えます。



桂田芳枝助教授と幾何学教室の人びと（1943～45年頃）

桂田は1967年、女性として北大初の教授となった（百年史編纂写真より）

《表紙解説》1941年理学部数学科に入学した女性たち

左から大杉富美子、渡邊雅

（唐澤隆三氏寄贈・大杉富美子関係資料）

ほっかいどうだいがくだいがくぶんしょかん

北海道大学大学文書館

〒060-0808 札幌市北区北8条西8丁目

〈TEL/FAX〉 011-706-2395

〈E-mail〉 archives@general.hokudai.ac.jp

〈URL〉 http://www.hokudai.ac.jp/bunsoyo/

〈開館日時〉 月曜日～金曜日 9:30～16:30（祝日、年末年始を除く）